

# 占いカフェの

# 片隅で

あはは☆るい



#5

真美が友里のカフェを手伝い始めて3か月が経っていた。

「おでんを始めようかしら？」と友里は言う。

「カフェでおでん？」

「寒い日はお温かいものが食べたくなるでしょ？」

「でも、テンペストにおでんは似合わないよ」

「そうかなぁ。試しにサービスランチで出してみるわ」

友里と真美が新しいメニューを相談していると、

背がスラリとした美人が来店した。

2人はあわててお喋りをやめた。

「いらっしゃいませ」

「こんにちは。この間はどうも」

そう言われても、真美は誰なのか思い出せなかった。

「私、常田美月です。美しい月の美月です」

「あっ」

真美は頭のとっぺんからつま先まで美月を見た。

まるで別人だ。

オフ会で来店したときは、トレーナーにジーンズ、スニーカーという身なりだった。

化粧っけもなく、リップクリームさえ塗っていなかった。

それが今日は、オシャレなニットのワンピースを着て、メイクもしていた。

「ヘアスタイルも変えました」

スッキリと短くカットされた髪は美月によく似合っていた。

「思い切って短くしたのね」

「はい。後ろで髪をくくれないのが、ちょっぴり寂しいですけどね」

きっと今の美月なら、無造作に髪をくくっても美人に見えるだろう。

「どこのモデルさんかと思いました」

美月は恥ずかしそうに微笑んだ。

「少し背が高くなったでしょ？今日はハイヒールを履いているので」

背がスラリと見えるのは、ハイヒールのせいもあるが、それに加えて、

明るく自信に満ちた美月の身のこなしが、体を大きく見せていると真美は思った。

「ヘアスタイルを変えて、お化粧品して会社に行ったら、

私に嫌味ばかり言っていた上司が、なんだか優しくなって驚いちゃった」

美月は話し方まで女らしくなっていた。

「あの日は、占いなんて、やらなきゃよかったと思ったんです。でも、試しにエジプト占いに従ってみるのもいいかな？って思って」美月は元々綺麗な顔立ちをしていた。スタイルも良かった。けれども、これほど変身できるとは、真美は思っていなかった。「占ってもらって本当に良かったです。ありがとうございました」美月にお礼を言われて、真美はくすぐったい気持ちになった。もちろん、一生懸命アドバイスしたつもりではいたが、あの時、ハトホルのカードが出なければ、これほど美月の気持ちを変えることは出来なかったかもしれない。美月はエジプトカードをさほど真面目にシャッフルしたわけではなかったが、エジプトカードは真剣に美月と向き合ってくれたのかもしれない。

美月が来店した夕方の時間は、会社帰りのサラリーマンが立ち寄ってくれる時間帯でもあった。ドアの正面に座っていた美月を、「おっ！」という顔で見た男性客が何人もいた。人は見た目ではないと言うけれど、見た目も大事だと真美は思った。

「このごろ会社で言われるんです」美月は恥ずかしそうに少しうつむいて言った。「知らない間に美しい月が会社に出るようになった、って。たとえ冗談だとしても、名前と性格が合わないって言われるよりずっと嬉しいです」しなやかな白い指で、美月はコーヒーカップを口に運んだ。美月は、顔やスタイルだけでなく、仕草も、話し方も、美しくなっていた。

人は日々、変化している。家族であったり、友達であったり、会社の同僚であったり、あるいはまた、テレビや本の影響を受けたりして変化している。影響を与えるのが占いであったとしても、何の不思議もないが、これほどの変化を目の当たりにすると、真美は嬉しいと思う反面、少し怖くなった。

美月が帰ったあと、めずらしいお客が来店した。  
真美と友里の共通の友人である木下沙耶夏だ。  
テンペストの表のドアに掛けている『営業中』の看板は、  
沙耶夏が開店祝いにと作ってくれたものだ。  
オープン前に開いた身内だけのお披露目パーティーには、  
沙耶夏も出席してくれたが、  
その直後に実家のお父様が倒れたとかで、  
お互いになかなか連絡を取れないでいた。

「いらっしゃい。お父さんの具合はいいの？  
気になってたけど連絡できなくて」  
「ありがとう。おかげさまで元気になりました」  
「ごめんね、お見舞いにも行けなくて」  
「気にしないで。こちらこそ、お店がオープンしたのに来れなくてごめんね」  
「ステンシルの教室はいいの？」  
沙耶夏はステンシルの教室で、先生のアシスタントをしていた。  
「やり手の先生だから、私なんていなくても大丈夫。また教室も増えたし」  
「生徒さんも増えたってことね？大盛況なのね」  
「そうなの。アシスタントも優秀な生徒の中から選び放題よ」  
「サヤちゃんも自分で教室を開けばいいのに」  
友里は真美のことは「真美」と呼び捨てで呼んでいたが、  
沙耶夏のことは「サヤちゃん」と、ちゃん付けで呼んでいた。

「教室を開くことはできても、生徒を集めるのは難しいと思うわ。  
それに、主人がいい顔しないのよ」  
沙耶夏は顔を曇らせた。  
「主人はね、私にきちんとした所にお勤めしてほしいと言うの」  
「何それ！？結婚前はステンシルを教えることに賛成してたじゃない？」  
友里が怒ったような口調で言った。  
「アシスタントのパート代なんてしれてるのよ」  
「だけど生活に困ってるわけでもないし...」  
「結婚前は気づかなかったけど、主人はすべてに細かいの。  
トイレットペーパーは1回につき1m、なんて言うのよ」  
沙耶夏は結婚して3年になるが、子どもが出来ないことで悩んでいた。

「そうだ、これからのこと、真美に占ってもらったら？」

「え？真美はついに占いを始めたの？前はあんなに嫌がってたのに？」

「私が土下座して真美にお願いしたのよ」

沙耶夏は真面目な顔で「そうなんだ」と言った。

友里はあわてて「嘘よ、ジョークに決まってるでしょ」と訂正した。

「大学のころ、真美によく占ってもらったよね。懐かしいなあ」

「サヤちゃんは恋占いばかりだったね」

「真美の占いは、本当によく当たったなあ。

ここで占うってことは、いくらか鑑定料ももらってるの？」

「500円。占いの大安売りよ。占いの価格破壊よ」

友里は両手を広げて大袈裟に言った。

「500円？それなら私も占ってもらおうかな？」

「そうしなよ、サヤちゃん」

店内は満席に近かったが、お客の注文は運び終えた後だった。

真美は占いを断る理由を探したが、すぐには思いつかなかった。

「占いはあそこの隅のテーブルでやってるのよ」

友里が指差した方向を見た沙耶夏は、

「へ～、立派な椅子とテーブルね。真美、占いお願いできる？」

「さあさあ出番ですよ、当店自慢の真美先生！」

お皿を拭いていた真美の肩を、友里がトンツと軽く押した。

「この椅子、もっと座り心地がいいかと思ったけど、そうでもないね」

沙耶夏が声を潜めて言った。

「真美も大変ね。占いは疲れるでしょ？」

「心配してくれるの？それなら今日の占いはなしにする？」

「せっかくこの椅子に座ったことだし、お願いするわ」

「ハズレても知らないよ」

真美はエジプトカードを沙耶夏に渡した。

「え？これで占ってるの？」

沙耶夏は少し驚いたようだった。

真美は大学のころは、主にペンジュラムを使っていた。  
いわゆる振り子だ。  
時には手相見の真似事もしたが、  
真美はどちらも中途半端な知識しか持ち合わせてなかった。  
それでも真美の占いは人気だった。

「エジプト占いなんて、初めて知ったわ」  
沙耶夏はカードを1枚1枚確かめるように見た。  
「さて今日は何を占いましょうか？」  
「驚かないでね。単刀直入に言うけど、  
私、離婚しようかと思ってるの。まだ迷ってるけどね。  
離婚したほうが、私は幸せになれるかしら？」  
沙耶夏は真美の指示に従ってカードを真剣にシャッフルした。

並べ終わったカードを、真美が1枚ずつめくってみると、  
あまりよくないカードが並んだ。  
中でも真美が気になったのは、結果のカードが逆位置の円盤ということだ。  
正位置なら、他のカードがどんなに悪いカードでも、  
最終的にはうまくいくとアドバイスできる。  
しかし、逆位置となると、沙耶夏が選んだ道が間違っていることになる。  
もしかしたら、この結婚自体が間違っていた可能性もある。  
カードをどのように解釈するのかは、占い師の腕の見せ所になるが、  
真美は沙耶夏の離婚について占う自信などなかった。

「ねえ、悪い結果が出たの？」  
真美がしばし考え込んでいると、沙耶夏がせかした。  
「私は離婚してもいいと思ってる。だからハッキリ言って」  
「仮に離婚したとして、沙耶夏はどうするつもり？」  
「そうね、貯金も少しはあるから、しばらくはのんびりするわ」  
「ステンシルのアシスタントだけで暮らしていける？」  
真美は沙耶夏が生活に困るようなアドバイスだけはしたくなかった。

「実はね、ステンシルの教室は辞めたのよ」

「え？どうして？」

「新しい教室のことで、先生と意見が合わなくてね。  
しばらくアシスタントをお休みする機会に辞めたの。  
でもね、教室を辞めたおかげで、  
ゆっくり実家に帰って親孝行できたから、  
これも神様のおぼしめしよ。そう思うことにしたの」  
真美は「離婚も神様の？」と思ったが、口には出さなかった。

「ねえ、カードの結果は何と出たか、早く教えて」

真美はどうアドバイスしていいのか、まだ迷っていた。

「カードの意味をお話しすると...」

真美が言い淀んでいると、沙耶夏が「遠慮なくどうぞ」と言った。

「カードは『あなたの選んだ道は間違っています』と出ているわ。  
でも、私には分からないの。沙耶夏だから本当のことを言うね。  
沙耶夏が結婚したことが間違っているのか、  
沙耶夏が離婚することが間違っているのか、私には分からない。  
カードの解釈は、占い師の技量で違って来るからね。  
私は未熟者だから、沙耶夏に的確なアドバイスは出来そうにないわ」

「的確なアドバイスなんか、私は求めてないから気にしないで。  
真美に何と言われようと、どうせ最後は自分で決めると思う」  
真美は料金は受け取らず、ここで占いを終了したいと思ったが、  
沙耶夏はねばった。

「その他のカードはどうなの？このカードは何？」

沙耶夏が指差したのは、アドバイスを意味するカードだった。

「F I R E（火）か。なんだか激しそうなカードね」

沙耶夏はカードを手を取った。

「このカードは何を意味しているの？」

そう聞かれると、真美は答えないわけにはいかなかった。

「見ての通り、激しく燃える火のカード。  
周囲のものを焼き尽くすという意味があるの。  
沙耶夏の望んでいるものは手に入ると思う。  
離婚したいと思えば離婚するパワーもある。  
このカードは、事態を良い方向に導くためには、  
今持っているものを焼き尽くせと言っている」

沙耶夏は黙って聞いていた。

「でも、もっと腕のいい占い師が鑑定したら、  
カードの意味も違うかもしれない」  
真美はあわてて付け加えた。

「私ね、真美にだけ言うけど、  
もう離婚する気持ちは固まってるの。  
だから、占いの結果がこんなふうに出て良かった」  
「ちょ、ちょっと待って。先ほども言ったけど、  
カードの意味を違う解釈で考えることもできるのよ。  
私の占いはハズレているかもしれないよ」

「安心して。真美の占いで離婚した、なんて言わないから」  
沙耶夏は笑顔で「ありがとう」と言った。  
そして、小銭入れから100円玉を5枚出すと、真美の手に握らせた。  
「あら、可愛い小銭入れね。どこで買ったの？」

「これ、私が作ったのよ」  
「沙耶夏は器用だね。私なんて取れたボタンを付けるのも四苦八苦よ」  
「そんなじゃお嫁に行けないよ。でも、結婚なんかしても...」

沙耶夏は途中で話すのをやめて立ち上がった。  
「何だか緊張して喉が乾いちゃった。もう一杯コーヒーいただくわ」

「どうだった？真美の占いは？」  
2人が戻ってくるのを待っていた友里は、  
カウンターから身を乗り出すようにして聞いた。  
「大満足よ」沙耶夏は短く答えて、満席に近い店内を見渡した。  
「それにしても、友里のお店、流行ってるのね」

沙耶夏はおかわりしたコーヒーをひと口飲むと、何の前置きもなく、

「ねえ、私をこのカフェで雇ってくれない？」

突然の沙耶夏の言葉に、友里は激しくまばたきした。

「ステンシルの教室は？」

「実は辞めたのよ」

「お父様の看護のために辞めたのよね」

真美が助け舟を出した。

「そうなの？もったいない。もう1度教室に戻れないの？」

沙耶夏はそれには答えず、

「ねえ、友里のお店で雇ってくれない？」と再び言った。

友里にとっては、有難い話だった。

沙耶夏は料理が得意だ。友里が手ほどきすれば、すぐに即戦力となるだろう。

そうなれば友里だけでなく、真美も楽になる。

オープン当初から、友里はもう1人アルバイトを雇うつもりでいた。

友里と真美のどちらかが、体調が悪くなったり、

冠婚葬祭などで店に出られないことを考えると、

沙耶夏からの申し出は、友里にとっては、この上なく良い話だった。

「でも、ご主人は沙耶夏がこんなカフェで働くことを良く思わないでしょ？」

「こんなカフェ？とんでもない、立派なカフェよ。文句は言わせない」

沙耶夏に「立派なカフェ」と言われた友里はちょっぴり嬉しそうだった。

「本当にお願ひしてもいいの？私は大歓迎よ。真美もいいよね？」

真美は頷いたが、少し心配になった。

沙耶夏がお店を手伝ってくれれば真美も助かるが、

それは沙耶夏の離婚を早めることにはならないか？

しかし、沙耶夏は明日からでもお店を手伝いたいと言う。

「サヤちゃんがそれでいいなら、私はすごく助かるけど...」

友里は給料が固定給ではなく、時給であることを話したが、

沙耶夏の気持ちは変わらなかった。

「サヤちゃんに来てもらえる時間帯は昼間だけよね？」

「ううん、真美と同じようにして。中途半端は嫌なの」

沙耶夏は本気だった。

「ところで、サヤちゃんは今夜は遅くなってもいいの？」

沙耶夏はしばらく考えてから、「何時でも」と言った。

「何時でも？そういう訳にはいかないけど、もうすぐ閉店だから、少し待っててくれる？私としても、詳しい話をしておきたいから」  
閉店時間10分前に、友里は営業中の看板をはずした。

「今日はありがとう。また連絡します」

沙耶夏は裏でゴミをまとめていた真美にも、「占いサンキュ」と声をかけて帰って行った。  
真美は片付けをしながら、2人の話をそれとなく聞いていたが、沙耶夏が友里に、離婚の話を全くしないことが気になっていた。

「サヤちゃんね、時給も慣れるまでは、真美より少なくていいって」

「でも、ご主人に了解をとらないといけないでしょ？」

少しムスツとした表情の真美。

「あれね、真美ったら、沙耶夏に嫉妬してる？」

私がサヤちゃんを雇うことに前向きだから、すねてる？」

「勘違いしないで。沙耶夏がご主人と不仲になることを心配してるの」

「そうね、うちに来てもらうのが原因で、夫婦喧嘩になったら困るしね。」

今週中に電話してくれると言ってたから、その時によく言っとくわ」

友里の少しうきうきした様子に、真美はイラッとしていた。

結局、沙耶夏は「テンペスト」を手伝ってくれることになった。

「主人も友里のお店ならいいよって賛成してくれたの」

沙耶夏は友里にはそう話していたが、真美には「私、もう決めたから」と言った。

沙耶夏がテンペストを手伝うようになってから、来客数が少し増えた。

沙耶夏は真美の何倍も接客が上手だった。

メニューにある料理も、友里に指導されるとすぐにマスターした。

すべてにおいて、真美より沙耶夏のほうが優秀だった。

「サヤちゃんが来てくれて大助かり。真美は占いに専念できるしね」

友里が言うように、沙耶夏が来てから、真美は占いをしている時間が長くなっていた。

占い目当てのお客が増えることは、  
お店にとってプラスの面もあったが、  
良い事ばかりでもなかった。  
飲み物さえ注文せずに、  
占い目当てで来店するお客もいたからだ。

「鑑定料が安すぎるのよ」と友里は言う。  
「占いを希望する人には、何か条件をつけたほうがいいと思うわ。  
飲み物と軽食は必ず注文するとかね」  
沙耶夏の提案に友里は賛成したが、  
いざ始めてみると、軽食と抱き合わせというのは難しかった。  
お腹が空いていないお客もいる。  
「食べようと思ったら、占いの順番がきた」と不満を言う客もいた。

「やっぱり予約制にしたほうが良さそうね。  
鑑定料は1件につき1000円。時間は10分。  
お1人様、相談は2件まで。  
最低、飲み物だけは注文してもらおう、これでどうかしら？」  
しばらくは友里の提案で様子を見ることになった。

占い目当てのお客は、予想以上に増えていった。  
真美はお店の片隅の椅子に座っている時間が長くなった。  
真美が手伝わなくても、沙耶夏がいるおかげで、  
お店はうまく回っていた。  
「真美の占いが盛況で、カフェの売上も増えたわ。  
真美、これからもよろしくね～」  
友里は真美が占いを続けている限り、ご機嫌のようだ。  
でも、占いをやめても、物腰の柔らかい沙耶夏がいれば、  
テンペストは何の問題もなくやっていけると、真美は思っていた。

友里も沙耶夏も、やる気満々で接客していたが、  
真美は占いのお客が増えたことで疲れていた。  
占いを始めたころは、1日に3、4人程度占っていたのが、  
今では1日に10人以上、多い時には20人を超える。

その日、真美は午前中4人、午後に8人を占って、お昼の休憩に入れたのは3時過ぎだった。休憩を終えて戻ってみると、友里と沙耶夏が楽しそうに話していた。友里は真美といる時より、沙耶夏といる時のほうが楽しそうだ。仲間外れになった気分の真美は、2人から目をそらせた。ふと窓の外を見ると、ザーッパラパラパラとすごい音。

「うわ～～、アラレが降ってきた。真美、休憩室は寒かったでしょ？」友里の問いかけに答えようとした真美だったが、なぜか「嵐が来る」と言ってしまった。

「サヤちゃん、真美先生の予言よ」「予言？」沙耶夏はきょとんとしている。「驚かせてごめんね。ホントに何でもないの」友里に予言と言われても、真美には予言をした自覚がない。沙耶夏は「予言ってどういうこと？教えて」食い下がったが、友里は真美の顔色をうかがって、詳しくは説明しなかった。

「予言ていうか、まあ予報みたいなもんよ。天気予報。ごくたまーに当たるの。真美の予報がね。嵐が来るということは、突風が吹くのもかもしれないね。表のドアに掛けてある営業中の看板、はずしてくるわ」友里は急いで看板をはずした。沙耶夏にもらった大事な看板だ。風は次第に強くなった。

友里は「やっぱり真美の予言は当たったね」と言ったが、嵐というほどの強風ではなかった。それが、テンペストに襲い掛かる「激しい嵐」の予兆であったとは、真美はまだこの時点では全く気づいていなかった。

その日の夕方、ひとりの女がすごい形相でテンペストにやってきた。「エセ占い師を出せ！」ドアを開けるなり、女は怒鳴った。

女はすごい形相で沙耶夏に「お前か！」と言った。  
沙耶夏が首を横に振ると、今度は真美に「お前か！」と言った。  
真美は後ずさりした。

「お前の占いのせいだ！  
当たりもしない占いやってんじゃねえよ、クソボケ！」

真美は女に心当たりがなかった。  
年末、年始に、占いを希望するお客が多かったこともあり、  
すでに百人を軽く超える人数を占っていた。  
印象的な人なら憶えているが、この女のことは思い出せなかった。

「このくそ野郎。慰謝料よこせ。  
謝れよ！土下座して謝れ！！！」

真美は怖くて何も言えなかった。  
その時だった。友里が毅然とした態度で、  
「お客様、静かにしてください。迷惑です」  
「なによ、あんた、喧嘩売る気！」  
「喧嘩を売っているのはお客様です。占いは絶対ではありません。  
ほら、ここにも書いてあるでしょう」  
友里はメニューを開いて女に見せた。  
そして、メニューの下の小さな字を指差した。

『当店では占いもやっております。  
占い★相談事1件につき千円。お1人様2件以内（2件なら2千円）  
占う時間は1件10分以内。（占いのみのご来店はお断りします）  
占いは、当たるも八卦、当たらぬも八卦と申します。  
それでもよろしければ、お楽しみ下さい♪』

真美は友里がメニューを新しくしたのは知っていたが、  
詳しく見たことはなかった。  
最後の2行は、友里が真美を思って付け加えたのだろう。  
友里は最後の2行を良く通る声で読み上げた。

「それがどうした！言い逃れするつもりか？」

女が友里の胸倉をつかんだ。

店内には数名のお客がいたが、

まるでお芝居を見るかのように、様子をうかがっていた。

「お客様、落ち着いてください」

沙耶夏があわてて友里と女の間に入った。

「つらい思いをなさったのですね。申し訳ございません。

お客様は占いで、どのようなご相談をされたのですか？」

女は黙った。詳しくは話したくない様子だった。

友里が何か言おうとしたが、沙耶夏が手で制した。

「お客様、せっかくご来店下さったのですから、

温かいお飲物はいかがですか？外は寒かったですでしょう？」

沙耶夏は女の手を取った。とても自然なしぐさだった。

「手がすごく冷えていますね」

両手で優しく女の手をなでる沙耶夏。

もしも友里や真美が同じことをしたら、女は手を払いのけたに違いない。

沙耶夏の接客には、癒しの力があつた。

そんな沙耶夏が、夫婦間ではうまくいかないのが不思議だった。

先ほどの勢いはどこへやら、女は沙耶夏に案内されて席に座り、

ホットココアを注文した。沙耶夏がココアを運んでゆくと、

女は小さな声で沙耶夏に何か話していた。

「お客様が、先ほどは怒鳴って悪かったって。

気が動転していたって。詳しいことは分からないけど」

「サヤちゃんありがとう」友里は沙耶夏にクッキーを渡した。

「サービスです、ってお客様に渡して」

クッキーを運ぶ沙耶夏の後ろ姿を見ながら友里が言った。

「サヤちゃん、強くなったよね？」

前はちょっとした事で泣いてたのに。

結婚して強くなったのかな？」

友里にも笑顔が戻った。

その日の午後、大和美穂がやってきた。

「やっほー、真美、久しぶり。

明美に余計なこと言ってくれたみたいね」

真美は美穂にも怒鳴られるのではないかと、ビクツとした。

「おかげで好調な売れ行きよ。犬の服。

注文が殺到して、予約が詰まって困ってる状態。

バイトでも雇おうかと思って」

「すごいじゃない！」

「でもさ、犬の服ばかり作ってるのもなあ」

「それなら人の服も作ればいいじゃない？」

「そう思うでしょ？だけどね、犬の服の予約がいっぱいで。

人間様の服を作る時間がないわけ。贅沢な話だけど」

「犬の服を注文する人ってそんなに多いの？」

「犬を自分の子どものように可愛がってる人は多いよ。

甘やかして、食べ過ぎの肥満犬がいっぱい。標準サイズだと、

『お腹のところのゴムが犬のお腹に食い込んで赤くなった』とか、

クレームもけっこう入るの。もう嫌になってきた」

美穂は疲れた顔をしていた。

「ホットミルクとジャムバタートーストお願い」

「コーヒーを飲まないなんてめずらしいのね」

「胃が痛くてさ。ここんところ、徹夜で犬の服縫ってたから」

真美は自分がアドバイスしたことで、

美穂が体調を崩していることを、申し訳なく思った。

真美の気持ちを察知したのか、

「私が胃の痛いのは、自分のパワー不足のせいで、

真美のせいじゃないから」と美穂が言った。

「ところでさ、真美の占い、人気なんだって？」

「おかげさまで」

「でも、真美は占いはやりたくないんだよね？」

美穂に聞かれて、真美は答えに詰まった。

占いを始めてから、真美は感謝されることも増えた。  
占いのおかげで「彼とデートできた」「仕事が決まった」  
「希望の大学に入学できた」「姑と仲直りできた」  
「自分に自信が持てた」「気持ちが軽くなった」・・・etc。  
わざわざお礼に菓子包みを届けてくれる人まであった。  
やりたくないと思って始めた占いも、  
いつしか少しだけ、真美のやりがいにつながっていた。  
だからといって、ずっと占いを続けたいか？と問われたら、  
「もうやめたい」という気持ちのほうが強かった。

「美穂はこれからも服を作り続けたい？」  
「私？そうだなあ、作り続けているかもしれない。  
他に取り柄がないからさ。  
そうだ、いつか、真美の服も作ってあげるよ」  
「期待してる。あんまり奇抜でない服をお願いします」  
「アハハハ。了解」  
美穂はいつものように、雑誌を何冊か読んで帰って行った。

その夜、帰宅してから、真美は自分の将来を考えてみた。  
この先ずっと、テンペストでパートで働きながら、  
占い師の真似事もしながら、何歳まで自分は働くのだろうか？  
そのうち結婚するだろうか？  
結婚したら、テンペストは辞めるだろうか？  
もしかしたら、一生結婚しないかもしれない。  
今の生活を続けていって、自分は幸せだろうか？  
引き出しから、古びた紙製のエジプトカードを出した真美は、  
久しぶりに、自分のことを占うことにした。

原因のカードは『セトの正位置』。  
結果のカードは、『ネフティスの正位置』だった。  
セトの正位置は、あらゆるレベルでの困難を示している。  
ネフティスのカードは、テンペストを今すぐ辞めるのは、  
ベストではない、と真美に警告しているようだった。

ネフティスのカードは、お守りとして使うと、  
とても強い保護力を持ったカードだ。  
強い保護力というのは、戦うという意味ではなく、  
天狗が姿を消す時に使う「隠れみの」のように、  
不幸な出来事から守ってくれるカードなのだ。  
真美は旅行に行く時、このカードをお守りに持参することもあった。

真美は改めてエジプトカードの解説書を開いてみた。  
ネフティスのページを見ると、  
『生活を大きく変えようとしている人は今は時期ではない。  
親しい人があなたを助けてくれます』  
といった意味のことが書かれていた。  
占うまでもなくテンペストを辞めたら、真美は生活できなくなる。

真美は自分が何をやりたいのか？と自分に問うてみたが、  
何も思い浮かばなかった。  
前に努めていた会社も、どうしても入りたい会社ではなかった。  
パソコンがある程度操作できて、簿記検定も持っている。  
アピールできるほどの資格ではなかったが、  
筆記も面接も何となくクリアして採用通知がきた。

その会社も辞めて、カフェの店員になり、  
友里に頼まれて占い師のようなことをやっている。  
真美は自分の人生は『何となく』の人生だな、と思った。  
『何となく』の人生でも、自分が納得できる人生ならいいが、  
毎日が充実しているか？と自問自答すると、  
「はて？」とってしまう。  
健康で、働けて、ごはんも美味しく食べられて、  
カフェで占いをして、時には怖いお客もいるけれど、  
占いをしたことに感謝してくれる人もたくさんいて、  
それで満足できない私って、どれだけ贅沢なんだろう？  
真美は「は～」とため息をついた。

真美は、OLをしていたのが遠い昔に思えた。  
あのころ、月曜の朝はひどく憂うつだった。  
今は？  
全く憂うつではない、と言えは嘘になるが、  
当時に比べたら、気持ちは軽くなったかもしれない。  
接客にも慣れて、占いもそこそこの人気だ。  
でも、本音を言うと、真美は占いをやりたくなかった。  
エジプト占いの中途半端な知識と、あとは勘で、  
何とか乗り切っている状態で、占いに自信が持てなかった。

先日も、女子高生に「ハズレちゃいましたよ～」と軽く言われた。  
ハズレたのは、受験に関する占いだった。  
「推薦で受けようと思うんですけど、この2つの学校のうち、  
どちらが私にむいていますか？  
私は保育士の資格か、福祉系の資格か、  
どちらから取りたいと思ってるんです。  
お母さんは、これからは福祉の時代だって勧めるけど、  
私は別にどちらにもそれほど興味ないし」  
女子高生は2つの大学のパンフレットを持ってきた。

本人が希望する道へ進むのが1番良いが、  
その本人が迷っていた。というより、  
何がやりたいのか、定まっていない様子だった。  
エジプトカードによる占いも、曖昧な感じの結果が出た。

「私はパンフで見ると、こっちの学校が好きなんだけどお」  
女子高生が見せてくれた大学のパンフレットは、  
まるでホテルなみの学食が完備されていた。  
真美は彼女がそう思っているなら、と、  
「こっちの学校が好き」と彼女が言った大学を勧めた。  
好きと思える学校に通ったほうが、勉強にも身が入ると思ったのだ。

それからしばらくして、女子高生はテンペストにやってきた。

「推薦、見事に落ちました～。

人気のある大学だから、たぶん落ちると思ってたけど、  
占いで良い結果が出たから、ちょっと期待しちゃった。  
落ちてもぜんぜん平気ですから。

占いがハズレたってこと、気にしなくていいですから」  
彼女はそう言って笑った。

悩みの原因は何か？

何がやりたいのか？

迷っているのはどういう事か？

それが分からないと、進むべき方向も定まらない。

まさに今の自分のことだと真美は苦笑した。

もしも、働かなくてもいいくらいに大金を持っていたら、

テンペストを辞めて、何をやるだろう？

ベッドに寝転がって、真美は考え始めた。

豪華客船で世界中を旅する？

ずっと旅するのも疲れそうだ。

それなら、朝はゆっくり目覚めて、お昼と夜は豪華に外食。

暇な時間は、習い事をしたり、ショッピングをしたり…。

そういう生活もいいかもしれない。

でも、その生活をずーっと続けていったら、

いつか、むなしくなるかもしれない。

自分で働いてお金を手にする、というのは、

思っている以上に、充実感のある事なのかもしれない。

そうだとしたら、何がやりたいか分からなくても、

とにかく働くことが重要なかもしれない。

そう自分で分析しておきながら、

「そうなのかなあ…」と、真美はつぶやいていた。

真美は結婚している自分の姿を思い描いてみた。  
子供は2人。男と女。  
庭付きの家に住み、休日は家族でお出かけ。  
優しい夫と、可愛い子供たち。  
結婚しても働く？それとも、専業主婦？  
幸せなら、専業主婦もいいかな？  
それにはまず、結婚相手を探さなくては。  
あ一面倒くさい…。

友里は自分が本当にやりたいことを見つけて、  
努力して、その夢を叶えた。  
自分は友里の夢の中を、さまよっているだけ…。  
真美は自分の心が無さにため息をついた。

翌朝、憂うつな気分で店に向かっていると、  
救急車が真美の横を通り過ぎた。  
救急車は次の通りの角を左に折れた。  
テンペストのある方角だ。  
今日は沙耶夏が早番で、開店の1時間前に来ているはずだ。  
沙耶夏に何かあったのか？  
嫌な予感がした真美は、急いで店に向かった。

テンペストの店の前で、救急車は停まっていた。  
「真美！」沙耶夏が泣いていた。  
友里が店の中で倒れていた。  
「友里が…、友里が…」  
救急救命士がテキパキと処置をしている傍らで、  
沙耶夏は泣きじゃくっていた。

「友里が殴られた…。友里が…友里が…」  
「誰に殴られたの？」  
「この間の…占いの…」  
沙耶夏は喋ろうとするが、泣いていてうまく説明できない。

「もしかして...」

ひとりの女の顔が、真美の頭に浮かんだ。

「友里を殴った女って...、この前、店に怒鳴り込んできた人？」

沙耶夏が頷いた。

「私の占いがハズレたと言って、わめき散らしていた女ね？」

でも、どうして友里を殴ったのかな？私を殴ればよかったのに...」

「友里の態度が高飛車で...、気に食わなかったって...」

友里は女に殴られて、意識を失ったのだと、

沙耶夏が泣きじゃくりながら答えた。

女はあわてて店の外へ逃げたが、

沙耶夏の通報で駆け付けた警察官によって、

近くの公園で取り押さえられた。

友里を殴った女の名前は、松川愛といった。

警察に事情聴取を受けている最中、

店に1本の電話が入った。沙耶夏が受けた。

「真美、電話ちょっと...」

沙耶夏が神妙な顔で真美を呼んだ。

沙耶夏は真美の耳に口を近づけて言った。

「中畑優樹菜って人から電話なんだけど、

友里を殴った人の知り合いみたいよ」

「中畑優樹菜？」

真美はその名を、どこかで聞いたような気がした。

「どちらの中畑様ですか？」

「オフ会でお世話になった中畑です」

「あの時の・・・」

明美のオフ会で占ったお客だ。

中畑優樹菜は、女同士で恋愛関係になり、

別れ話がこじれて、体調までおかしくなっていた。

優樹菜は絞り出すような声で話した。

「松川愛という女が来たら気を付けて。

何をするか分からないから」

真美はただならぬ優樹菜の声に、

「あなたは大丈夫なの？」と聞き返した。

しかし返ってくるのは、優樹菜のすすり泣くようなうめき声だった。

「赤い…」真美は無意識につぶやいていた。

「あなた、もしかしたら、刺されたんじゃないの!？」

優樹菜は泣くばかりだった。

優樹菜は松川愛と別れ話がこじれて、

カッターナイフで斬りつけられたのだった。

真美が警察に事情を話したおかげで、

すぐに優樹菜は救急車で病院に運ばれた。

幸い、優樹菜の刺し傷は、それほど深くなかった。

友里もショックで気を失っただけで、軽い打撲で済んだ。

取調べによると、優樹菜は松川愛と恋愛関係にあったが、

優樹菜から別れ話を切り出されて、恨んでいた。

真美がテンペストで優樹菜を占ったあと、

優樹菜は愛とよく話し合い、愛も別れることに同意した。

しかし、優樹菜が男性と付き合い始めたのを知ると、

態度が急変したのだと言う。

愛は毎日のように、優樹菜に電話をかけてきた。

「男と付き合うと、あんたは不幸になる。別れたほうがいい」

優樹菜は彼に、愛と付き合っていたことを正直に話した。

そして、愛に彼を紹介して、自分の気持ちを話した。

「優しそうな人ね」と愛は微笑んだ。

優樹菜は愛が理解してくれたのだ思い込んでいたが、

その時にはすでに、愛は精神的にかなり病んでいたようだ。

「あの占い師のせいだ。占い師が男を紹介したんだろ！」  
愛は興奮して、支離滅裂なことを優樹菜に言うようになった。

「勘違いしないで」と優樹菜が何度説明しても、  
錯乱している愛には、優樹菜の言葉は通じなかった。

騒ぎはこれだけでは済まなかった。

松川愛は、テンペストに初めて来店した直後に、  
週刊誌の編集部宛てに、『男を斡旋する占い師がいる』と、  
実名でしつこく手紙を送っていたのだ。

初めは編集部も相手にしなかったが、  
優樹菜が刺され、愛が逮捕されたことで、  
真美のことも、面白おかしく書き立てた。

真美は占いは、中止せざる得なかった。  
興味本位で来店するお客は増えたが、常連客は離れていった。  
友里は考えた末に、しばらく店を閉める決意をした。

「ごめんね友里。私のせいで...」  
「何言ってるの？真美は何も悪いことはしてないよ。  
無理やり真美に占いを押しつけたのは、私なんだから」  
友里は心からそう思っていた。

「サヤちゃんもごめんね。せっかくお店を手伝ってくれたのに」  
「そんなこと気にしないで。私は実家に帰ることにしたわ。  
今度、実家をバイアフリーに改築するらしいの。  
ついでに家の一角を、ステンシルの教室にしてもらおうと思って」  
沙耶夏は正式に離婚して、自分の道を歩き始めたようだった。

「真美、本当にごめんね。会社まで辞めさせちゃって...私...」  
友里が泣いていた。いつもキラキラ輝いている友里が。  
「友里、心配しないで。私は大丈夫だから」  
そうは言ったものの、真美はこの先のことを考えると、  
不安に押しつぶされそうだった。

あの事件から2年が経過したころ、友里はカフェを再開した。店内を少しばかり改装して、以前より明るい雰囲気になった。かつてあった占いコーナーは、見当たらなかった。占いらしきものを見つけるとすれば、おしぼりだ。おしぼりはタオル地ではなく、紙製で、広げると、色鮮やかな曼荼羅（マンダラ）模様だ。

店内のあちこちにも、曼荼羅模様の綺麗な布が飾られていた。その下には説明書きが。

『曼荼羅は左右、上下、斜めの模様が対照です。整然と並ぶ美しい模様を眺めていただくことにより、皆様の心が安定し、安らぎが得られますように。』

作者 **大和美穂**

曼荼羅模様のデザインで、昨今、世界的に注目を集めている服飾デザイナー。おしぼりの曼荼羅模様も大和美穂のデザインです。おしぼりはご自由にお持ち帰りください。

「友里のカフェは、相変わらず盛況みたいね」  
沙耶夏が久しぶりにカフェを訪れていた。  
「おかげさまで。私の魅力のせいかしら？」  
友里は腰に手を当てて、茶目っ気のあるポーズをとった。

「そういえば、真美の結婚報告には驚いたよね。  
まさか、友里の顔見知りの人と結婚するなんてさ」  
「そうね。でも、なんとなく、そんな気はしていたけどね」  
「もしかして、友里も超能力者？友里だけに、ユリゲラー」  
沙耶夏は手のひらをユラユラさせて、『気』を送るふりをした。  
沙耶夏のおやじギャグがツボにはまり、  
友里はしばらく笑いが止まらなかった。

真美の結婚相手は、読者の皆さんもご存知の男性。  
カフェ・テンペストがオープンした日にやってきた、  
ベレー帽の男。（憶えてますか？）

真美はテンペストが閉店した翌日から、  
ハローワークに仕事を探しに行った。  
産休に入る社員の代わりに、1年間だけという契約で、  
事務員を募集している会社があり、真美は応募して採用された。  
その会社こそ、ベレー帽の男が次期社長になる会社だった。  
縁とは不思議なものだ。

男の名前は、門川祐輔。  
曾祖父の代から和菓子屋を営んでいた。  
祐輔が経営に関わるようになってからは、通信販売も始めて、  
全国的に名前を知られる老舗になっていた。

1年の契約期間が終わった時、祐輔は真美に言った。  
「契約を延長していただけますか？事務員としてではなく、  
私自身と、お墓に入るまで一緒にいてもらえませんか？」  
真美は一瞬、何を言われているのか分からず戸惑った。  
「つまり、私と結婚を前提に、お付き合い願えませんか？」  
真美もこの1年の間に、何かと話の合う祐輔に少しずつ魅かれていた。  
それからは、とんとん拍子に話が進み、半年後に結婚。  
最近はパワースポットにはまっていて、  
休暇のたびに、2人で旅行に出かけているようだ。

「それにしても、友里は思い切った店名にしたのね」  
「まあね。いつでも真美が戻ってこれるようになって」  
「でもさ、この店名だと、逆に戻りにくいかもしれないよ」  
沙耶夏は誰に言うでもなく、店名をつぶやいた。  
「占いカフェの片隅で」  
友里が静かに微笑んだ。  
午後の日差しが優しく店内を包んでいた。

最後まで読んで下さって、ありがとうございました。